

蕉翁
句解

說叢大全

壹



叙

痛き所我々の乃剛強いもの
 よく我思ふべきなりとて
 る智いなきの世のいふまに
 日ハたあゝのあゝ一紀略よ
 必よの浦乃深の玉座にさく

中よ古人のたれしとよ歌詠譜と名つけし
きよおりのこの道代よ飛流は乃結玉
乃そり乃も子舞はふき初し法をいひ
の連歌とらむとの世もいふそと今のくさ
らひ乃生むらこはる母もなん河あるその
比よ山崎乃宗鑑并法乃流えいそのまを

部乃貞徳おそそまろし一色蓮とのくさ
その貞徳の流をくさし法中書吟ん
傳くひおのそむそひすし一色蓮に
かへりわの中流世乃祖をむうん其のそ
ありきしむおよふらむそそむいそそ乃
花音月雷乃時つひおむまきそらむ

わらふ葉をてての白のさか乃の舞のさかへり
うらゆく葉乃のさかへりてまゝのさかへり
あゝとさかへりてさかへりて伊勢乃の役は
まゝのさかへりてさかへりてさかへり
かゝるまゝの伊勢をさかへりてさかへり
さかへりてさかへりてさかへりてさかへり

序二

室をまゝのさかへりてさかへりてさかへり
月のあせりてさかへりてさかへり
まゝのさかへりてさかへりてさかへり
人乃のさかへりてさかへりてさかへり
かゝる舞のさかへりてさかへりてさかへり
あゝとさかへりてさかへりてさかへり

水乃乃海のそそくしつとの君子加の流
りしつとふ明の九年うつきのうしめり
のそそくしつとふ明の九年うつきのうしめり

新編意の阿経院佛

漢

次序

說叢大全序

夫人感物而動者性之欲也
含齒戴髮所不能無咨嗟
咏嘆比興相移不淫不傷
芭蕉君桃青其人也清心
以見常風雅以為生一

筮一製曾無長物朝遊上苑夕到荒邨朗然胸次思無邪乃不識錦囊之重者也所謂不得天下之至美與至樂而樂者非耶白駒既過而不息積有弓曰芭

次序二

蕉集近來其注疏出之三部曰師走袋曰評林曰句解斯不知翁者所為而唐突西施刻畫無鹽惜哉金篇玉章變作瓦礫一旨引衆旨莫甚焉古云解之愈

增スノミ惜ラ懂ラ者耳於テ是ニ葛飾素
堂第三葉絢堂君素丸俳
林翹楚詞海長鯨為メニ之カ忼
慨夢寐スルヲ於桃君十年于茲
涉獵百家于神于儒捃ニ摭ス
掌故始功一篲九尋已成

次序三

殺青五卷名曰說叢大全
嗚呼可謂淘之汰之勤矣
擲ツキハ之則錚然トメ有金石之聲
既讀而從來之三解瓦解ケ
氷消秦鏡當臺ニ妍醜無所
逃ル胡漢自分點竄有日隳

括之極矣。是實后世之典
型。天今降穎素丸君。回蕉
門既倒之瀾。獨得桃君感
發之真也。六義即粲然。鉉
槩之功不在禹之下。不亦
愉快乎。予先人桃翠。昔日

次序四

遊于翁門。從事於此。有年
不忍。愬然棄棠蔭之遺愛。
故丸君被屬以序。謝不敏。
不可予以先子之號。亦嘗
丸君之所命也。於是乎古
毛州陳人那須桃翠。序於

東都感應樓

蘇明和辛卯夏五月



蕉翁發句說叢大全卷第一

總論

古人の曰一書を得て證と云ふ不足なりと。先達明師博才。碩
 徳の人乃書多しむハ一書めりもたり多し。其餘ハ近來の輩此
 云何也。爰に芭蕉翁の發句と云々也。或ハ注し。或ハ評し。何
 んぞ解し。其の三部あり。いふも教。師走袋。評林。句解是也。
 ほしく聞きた。何れは誤り。或ハ非ふ。あるは解を摸羅含糊
 あるなり。又蛇足贅語とあり。其中に至て非妄なるハ。師走袋
 よ色々依之の如し。評林通例のりありて。其文意わきかた死色多
 し。句解ねほむね。其所を得たりと尺ゆきとも。證乎あま

を附會してらん。又平の忠度乃、引きての又文字を、行末を
と、解もて、死、是等の及逆人の流めく、かりとめ、あをり、
より、古戦より、み、ち、す、世、か、憚、る、金、事、あ、
爰、木、曾、の、雪、解、乃、句、を、義、仲、の、勇、烈、あ、比、
統、の、人、狂、思、へ、

評林は多く世の如く、一通り、正、あ、粗、見、解、の
遠、り、競、の、こ、梅、の、こ、き、理、無、解、の、注、と、云、
多、古、平、を、出、す、と、い、は、是、又、い、ち、あ、り、
と、あ、ん、て、古、歌、を、多、く、業、と、い、は、
ち、も、り、風、と、吟、と、句、自、然、と、古、平、あ、か、
評林は多く世の如く、一通り、正、あ、粗、見、解、の
遠、り、競、の、こ、梅、の、こ、き、理、無、解、の、注、と、云、
多、古、平、を、出、す、と、い、は、是、又、い、ち、あ、り、
と、あ、ん、て、古、歌、を、多、く、業、と、い、は、
ち、も、り、風、と、吟、と、句、自、然、と、古、平、あ、か、

總論三

よ古歌古事ふ奇く、俳諧の句、有、句、毎、よ、あ、
歌をとりて業と、い、は、
の、僻、念、り、も、や、
ハ、曹、孟、翁、の、意、を、破、家、も、の、ち、
評林と云、史記評林も、漢書評林も、諸史百家の評を、あ、ま、
多、い、む、し、何、ぞ、や、一、己、の、評、を、り、林、と、い、は、
句、解、ハ、三、部、の、う、ち、め、て、尤、
粗、爪、は、き、り、り、て、備、
亦、翁、乃、心、骨、小、あ、
又、其、句、の、餘、情、を、解、
中、引、用、後、分、粗、齧、

よ古歌古事ふ奇く、俳諧の句、有、句、毎、よ、あ、
歌をとりて業と、い、は、
の、僻、念、り、も、や、
ハ、曹、孟、翁、の、意、を、破、家、も、の、ち、
評林と云、史記評林も、漢書評林も、諸史百家の評を、あ、ま、
多、い、む、し、何、ぞ、や、一、己、の、評、を、り、林、と、い、は、
句、解、ハ、三、部、の、う、ち、め、て、尤、
粗、爪、は、き、り、り、て、備、
亦、翁、乃、心、骨、小、あ、
又、其、句、の、餘、情、を、解、
中、引、用、後、分、粗、齧、

胸中知るるを強し^テの^レた^レ何^レと^レ既^ニ。○涼袋^ガ片^ヲ二夜
 同答^カも云。世の人初春のたりとていつまも何^レと^レ此衣^ニ
 留^ルれ^ル中^ニに薦^カふ^レし^レら^レ着^テお^クる^人も何^レと^レ非^人の薦^カふ^レ
 てい^はは^しる^もす^も又^豊なる^御代^の春^ハに^非人^の薦^カふ^レと^レ
 非^人の^薦ふ^レし^レも^新暇^カふ^レふ^所あり^しと^もす^也此^海の^何句^ハ
 意^の事^カハ^ある^在の^御下^賤れ^者に^對して^は何^レと^レ何^レ
 あ^らば^近以^色雀^句解^とし^て冊^{あり}る^也と^もす^孫農^の
 事^ハい^へり^大か^きあり^孫農^の事^を作^らる^と非^人の^此
 並^座き^や又^梅慶^の眼^もた^うひ^句作^らる^は何^レと^レ何^レ
 何^レと^レ何^レと^レ○右^の同^答の^事ハ^いは^すの^御下^賤れ^りの^事

苗^らぬ^とい^ふを^長く^して^流し^ぬ。此^地者^色亦^此句^乃婦^もえ^ん
 何^レと^レと^ええ^り。句^評し^ると^うと^あら^ば撰^して^一句^何と^レ
 ら^んど^菘着^りと^んば^もや^非人^乞食^也の^思ひ^ハい^はは^すを^い
 非^人乞^食に^いは^すの^御下^賤れ^りの^事ハ^いは^すの^御下^賤れ^りの^事
 尺^短く^偏辟^乃論^者と^世に^并り^也。在^の御^下賤^れる^事ハ^いは^す
 ば^早く^知り^ぬ。○馬^光家^書の^内素^堂、夜^話剛^也
 小^云我^素隱^士小^冊句^を同^素堂^答て^曰是^ハい^はは^すの^事ハ^いは^す
 の^餓人^也。十二^月に^子對^面あり^し。歲^旦も^深た^るに^橋の^下
 り^もを^食え^りた^つげ^て何^とと^思ひ^出して^吟せ^り也^{。初}
 も^はら^らば^の地^説あり^也。如^此澄^説ハ^夢あり^也。○秘^史

ちりりとて。初車を迷ひの海女の歌うり。た。海まがく
 形す也。信し敬と。一。黒鹿同解。同派と。た。依と。ぬ。い。片
 この初と。叶つりと。え。下。下。下。似。合。作。と。人。小。春。秋。傳。の
 よ。ま。せ。ち。は。一。足。も。動。く。り。あ。る。は。一。字。に。衰。敗。と。り。よ。と
 だ。も。ん。づ。の。ざ。り。と。ひ。○日本紀曰。推古天皇二十一年。冬。十二月
 庚午朔。皇太子。旌行於片岡。時。飢者。臥道。垂。其。○元。年
 釋書曰。推古二十有一歲。十二月朔。太子。過片岡。兵。飢。人。之
 之。の。名。跡。を。し。す。し。と。四。友。の。あり。て
 遠。皇。一。ま。は。よ。元。日。れ。を。ま。へ。付。して
 賜。又。ら。り。し。と。り。

二日少色ぬらりせ。か。新。乃。春

林 云。雪。の。氣。情。を。う。り。元。日。の。新。麻。し。て。一。と。せ。の。曙。を。え。
 くら。く。る。限。者。乃。境。界。も。二。日。少。色。ぬ。ら。り。せ。と。二。日。少。色。ぬ。
 麻。し。て。珠。の。暁。を。思。ひ。あ。ら。む。世。は。泥。濁。の。交。り。し。屈。原。の。腸。を。
 探。り。し。も。心。を。下。り。ぬ。ら。り。せ。と。白。氏。文集。勸。學。計。一。年。有。
 陽。春。と。每。益。を。れ。と。下。啓。す。 **袋解** 此。句。を。出。さ。し。

説林 の。世。深。文。意。例。の。摸。羅。含。糊。か。い。え。わ。ら。り。お。ぬ。ら。り。前。を。
 を。え。ら。り。た。音。より。友。の。あ。ら。し。酒。興。し。翁。を。か。り。解。て。は。ら。
 一。前。鏡。よ。新。麻。し。え。直。ま。に。起。り。身。解。ら。ぬ。と。是。の。ま。を。

閑樂のさ極めて世にかりぬ取え。よし目えてぬくや
 きげいとせのぼ。ゆれ晴をえんか。けふよよ。そしく二日
 とすもぬくりかぞ。暁をえんや。二日とすも。よよの春
 てことあはれ。淡滞を。心の程を。黄も。金。ぬり
 いせ。か。い。地。河。い。ま。ぬ。と。云。よ。め。し。爰。を。俳。諧。の。活。前。と。云。也。
 林。海。の。あ。き。い。わ。き。く。お。森。い。く。と。は。ぬ。す。り。い。今。時。の。り
 せ。か。き。ふ。賣。僧。侶。者。の。さ。は。み。て。蘇。の。乃。心。よ。き。夢。だ。い。あ
 乃。く。げ。も。也。是。酒。を。さ。く。味。い。は。の。兼。評。し。又。屈。平。賦。を。け
 る。事。つ。ゆ。ど。渠。ハ。忠。誠。の。大。臣。し。桑。門。の。類。い。よ。あ。い。も。そ。春。氣
 雲。泥。懸。隔。の。た。び。い。い。は。色。の。百。菴。か。ん。ん。蘇。よ。課。罪。とい

く。く。ぞ。う。く。又。白。氏。の。詩。い。い。ぬ。り。い。ま。の。評。め。い。い。て。さ
 あ。く。次。古。語。一。歳。計。在。元。旦。と。云。語。也。白。氏。を。り。用。い。て
 へ。河。ら。い。ぬ。り。い。ま。ぬ。と。い。ふ。か。け。し。な。る。き。や。あ。い。ぬ。い。り。り
 評。し。下。新。

か。う。ら。い。り。ま。ご。や。伊。勢。乃。初。便。也

表 云伊勢の初便のききたる事。元日と云。こはのり成程一奉

邊 表亦有伊勢海老守世の事。知下一渠小ありともす。らや

林 云益菘のきには妻らいせよ。あ。人。も。信。て。後。時。き。花。林。子。か

世。子。を。下。あ。り。し。て。何。と。か。く。梅。子。橋。を。白。中。あ。い。て。邊。表。よ。よ。せ

らど我をえとて集む。

○説 慈鎮の燈予書に云に、げまのびまのつらひをいふ也。

○拾玉和歌集慈鎮の集の第四賀茂法樂詠百首和歌夏十首

のうらけいひのせたまふ人と云、此予、何れをいふ。

何れもけつり種一法樂乃年月も云れぬ也。猶受おし

まの種一又類句ぬいひ後の、云出し、使ふつらと出た

と。家集を燈とも云ふ也。○百卷が万々葉に記せし

拾玉集もは初句けいひつら夫木集も載之、永末の原

治末ふいひやと云りて、第四句のつらと有書、鳥乃誤は

今さら云へるは、つらと云ひ春つらと云ふ、此分難解、予

慈鎮和尚の真跡乃一帖を爰見して、は度り小決之、云○

柑子の夏橘ハ、日本紀也。垂仁天皇御宇。九十田道間守ジモノリ

世信、田道を姓、間守を名とし、先トハ、常世國へ遣られ、橘をりてめしむ

る。あまなぬく人の初り也。後續日本記よん、柑子乃

来り、ハ、神龜二年十一月己丑、天皇御大安殿、受冬至、賀

辞、中典鑄正六位上播磨直弟兄オト並授從五位下弟兄初

賈、柑子、從唐國來、虫麻呂先植、其種結子、故有此授馬。

今と云りてハ、種一のつらあは、り、皆同様也。か

く異あるの、本草を考む、橘ハ小く、味も苦、つら、柑子

ハや、大なり、味の甜なり、や、柑子と云ふ、上古ハ皆

可謂遺恨乎と海にべりいづれ。世に解いて候。此の
 解をいふ。念きか。思われ候。稻中菴黒鹿をかいていふ。こ
 我の年の末。菴へ候。黒鹿かいていふ。身はけり。小。道。返
 して云。いづ。て。去。りて。是。能。か。と。い。か。せ。す。う。い。り。と。い。ら
 中。成。物。持。り。て。和。平。愚。叟。多。り。と。念。き。う。た。河。を。必
 沙。持。す。と。い。ふ。一。老。人。と。い。か。せ。め。と。い。ふ。今。度。き。ん。も。願。一
 程。一。菴。の。句。と。い。ふ。初。後。き。う。ば。伊。勢。の。後。り。か。と。い。ふ。地。而。の
 後。り。い。何。う。き。ん。と。い。ふ。○去。来。抄。小。云。你。川。い。り。の。文。云。此。句。は
 去。来。の。語。り。り。汝。い。る。す。は。り。や。と。い。ふ。去。来。曰。都。古。口。の。後。り
 と。い。ふ。か。す。伊。世。と。い。ふ。元。日。の。式。乃。今。様。か。う。ぬ。小。祢。代

を思ひ出さる。後。す。も。や。と。乃。祖。神。の。も。や。胸。中。で。さ。い。か。い。な
 か。と。い。ふ。初。り。は。り。と。い。ふ。菴。曰。汝。す。亦。多。り。汝。今。日。祢。代。
 か。く。我。り。と。い。ふ。と。い。ふ。一。菴。和。尚。の。語。か。と。い。ふ。初。の。一。字
 を。略。し。知。り。は。り。と。い。ふ。又。臨。去。に。伊。世。よ。と。い。ふ。人。か。い。つ。り。て
 後。り。は。り。と。い。ふ。と。い。ふ。菴。曰。汝。す。亦。多。り。汝。今。日。祢。代。
 の。い。ふ。な。ら。う。と。い。ふ。汝。う。す。法。淨。の。う。り。と。い。ふ。祢。代。乃。か。い。と
 我。り。と。い。ふ。達。来。よ。對。し。と。い。ふ。祢。代。と。い。ふ。汝。す。亦。祢。重。也。と。い
 此。説。秘。藏。と。い。ふ。と。い。ふ。也。妄。説。は。り。と。い。ふ。初。ま。の。説。ひ。多。け
 き。ハ。汝。一。か。一。ぬ。菴。の。自。注。も。同。と。い。ふ。也。是。を。り。つ。て。正。證
 乃。句。解。と。い。ふ。也。一。元。賢。々々

お子良子の一りこむし梅乃也

解云おつ子ハ俗言ありてお子良子也太神宮の神饌を奉る
ふ少女也神前梅を奉るは是の意ありと云

袋林

い句と出た

説此解據ありと云らん。然れども梅樹の稀なるはふは

吟ありといはん。狸屋も近くしてゆきぬや。千梅の

雙纏輪フクカセ少云云と云らん。○雙纏輪云ヲハラゴ太神言

ノ神饌ニ奉仕スル小女也ヲハラゴハ俗言ニシテ本稱ハラコラ

ゴ也伊勢神宮ノ内ニ子良物忌ト称スル社家尤七八家存テ

其娘ヲ以神圖備之其父母共ニ居スル室殿ヲ子良ノ館ト

云是則神樂殿也依テヲコラゴハ御神樂子ノ訛言也トモ

云リ中略又按ヲハラゴトハ御被子ノ略テラレ俳諧ニハラハラゴ

凡云ベシ俗言也トモ世ニ久シク云習イタルコト最可用之ト云

○子良の館タチと云奉祭典式ふもろく。佛ツと云ハ俗ハ致

てツムツムと云ハと云らん。○此句一りといふと云ハ洗心と

云ハ。是おこらごと云ハその形容の賞詞也。梅とのと云らん

は梅ハ清浄潔白なる花なり。はあらごとの唯ひとり

端正ありてよく神意にあらは。仕へ奉る身事也。梅よ喻へ

て貴泳せし句。句乃正脈也。うらふ屋ウラフと云ハ。句意也

ハ。梅ウラフと云ハ。梅樹ウラフと云ハ。梅樹ウラフと云ハ。梅樹ウラフと云ハ。

いといふほど。行かゆし。此も也。梅はりて少婦貞女
比する例。古今詩分多。奉るにゆくはか。

神垣やおさしむかけは涅槃縁

林云。何勢の日。此本の神社ありておさしむかけは涅槃縁
兼て亦佛法の系も現世未来を兼し句意かへりか
神恩もまゝ佛恩の方便もいつまもも亦も何とんか
より多誠さしむかけはりぬさしむかけもまゝ未来此
より死に法沙何ともありはるるといふねともかへり

さみ洞るゆき。難深まを丁尊也 **解**云。金葉神垣の何なり
とありともよたす此さしむかけぬのまゝはりか
て無き迅速の句情係 **袋**此句出さ

説 **林**一通りの何さしむかけはりぬさしむかけもまゝ未来の
さしむかけはりぬさしむかけはりぬさしむかけもまゝ未来の
古き連俳集要とさしむかけはりぬさしむかけもまゝ未来の
よりかへりぬさしむかけはりぬさしむかけもまゝ未来の
枯いつらくの難い句は。色現未乃三世をこへりといふ
とむさしむかけはりぬさしむかけはりぬさしむかけもまゝ未来の
何とて檢校もさしむかけはりぬさしむかけはりぬさしむかけもまゝ未来の

梅の風情のこの宿乃らん汁

袋 云卅句乙州東武行に饒しきの白也 中略 白意は東武に

名物をかりて面白時の季をとり好士のくまに注を略と

林 云上畧 旅を去り人の名なくは風流を一句よ葉内片をて

送るし是風雅の友に志をききりふく **解** 云乙州大津

より東武の饒別は梅よ青白の色立ゆてるは風流

さうととに心も慕ふ 中畧 句三段切 口受

説袋 東武の名物で流して云いぬく ハハ やい

む。又面白時の季をとりぬ夜白やい。竹も。以布の文

意也 **林** 俳友の志といふ 乙州 此才子ありてな

あつど。卅旅りの時。翁より史邦へ送る。本稿予。可持とを

門才の文解し。 真跡集 二出タリ **解** 大よ擴ゆり。然りと。色立乃

事い。全く世の好まゆむ。翁は河心なく。梅わつかと。尚

とがづ。奉つてぬる也。誘て。梅も。事い。梅は。り

又。菟弱よ。青緇の色立と。原のむ

や。晴き。柳の及。緘し。青白黒の色立と。人や。事な好

人を梅とす。梅は。

○白意は。梅も。おらと。川。梅は。事な好

に。増て。鞠子。梅は。淋。梅は。事な好

す。しら乃心で魅めか。うら。一。き。う。い。は。無。益。の。後。つ。う。ふ。春。里。く。す。ふ。よ。表。さ。る。く。を。後。あ。い。ま。示。誠。を。う。け。し。是。翁。の。心。骨。也。能。く。可。考。也。○三。段。切。口。文。と。い。れ。も。古。を。抄。し。て。傳。へ。ま。し。一。度。及。ん。人。の。う。解。を。解。し。

三段切

目よき茶。山やうきん。初観。
梅。よ。茶。ゆ。り。こ。の。花。の。と。ん。け。

○再撰貞享式云。前略。前章ハ素隠士ハ鎌倉の吟りし世句の杯も。而ハ句。小。と語勢をいハ。抄。し。て。耳。に。口。に。と。心。を。ぬ。く。め。し。る。は。影。畧。互。見。の。法。し。て。是。等。を。三。段。の。切。と。し。て。一。は。ま。い。未。刊。の。餞。別。し。乃。と。う。く。此。優。遊。の。梅。も。ゆ。り。よ。茶。も。

ゆり鞠子乃翁小い。と。う。く。汁。も。ゆ。り。と。と。い。や。う。く。海。風。情。を。う。く。よ。か。い。植。物。と。食。類。と。に。結。前。生。後。の。嫩。あ。り。て。と。う。く。梅。つ。の。か。の。は。や。や。翁。も。十。成。の。俳。諧。脚。也。是。等。を。三。段。の。女。節。と。知。し。て。一。早。竟。の。句。中。に。切。字。を。い。れ。て。も。是。れ。と。夫。の。差別。を。り。て。三。段。の。例。の。三。別。を。う。く。や。と。い。句。海。も。益。あり。と。い。も。初。案。也。口。傳。く。く。迷。り。し。も。や。歌。さ。ん。今。文。池。の。ぬ。ち。海。も。ゆ。り。よ。茶。も。と。い。お。と。う。く。琴。の。塵。

林云。簫の友に春鶯啼の曲なり。是ハ秦始皇の爲蒙恬といふ人初て作らる。傳也。詩小之林鶯何處吟。簫挨嬌柳誰家曝。

叶二字誤。又解

麴塵解云是ハ樂器乃画讚也劉向別録曰魯有善歌虞公發

聲清哀拂動梁上塵けいみりの梁上の塵ちりと云む

と云ふけいみりのちりのまを千鍛を稱とすけいみり

説

林

妄注年ちつて鼻へ出ると云ふ塵と又又又又のつ

まるをえんず又又春鶯鳴の必晴茶に磔ちつと簫ハ和

名抄風俗通云舜作簫先堯及和名簫ハ和名抄風俗通云

神農造箏姐耕及倍云或曰蒙恬所造秦聲也と何り簫とフエ

箏と混雜ともゆや琴の白に簫の注齟齟せと又詩も

と云い詩經の外いえりぬ事し誰の詩集とも記しときと法と

と云ふとけいみりとも引用分詩と云ふと何やと何り

○白氏文集二十卷八天宮閣早春律詩天宮高閣上何頻

毎上令人耳目新前日晚登緣看雪今朝晴望為迎

春林鶯河處吟箏柱檣柳誰家曬麴塵可惜三川虛

作主風光不屬白頭人ゆは全かせりと出とと也簫換

といふあのゆやゆゆといふ二句何とて并白小河といふ

ゆやゆゆといふ二句何とて并白小河といふ

引度きやや又琴の塵と云ふ解とぬまた麴塵と云ふ

の事もゆやと附合せと云ふ麴塵ハ琴なるからりと柳の

事もゆやと附合せと云ふ麴塵ハ琴なるからりと柳の

天皇の御衣をきくちんりりびと堂上の人ハ着ゆと云ふ

麴塵ハ琴なるからりと柳の

るさうと。只麓人の抱願してきりうり。概のさ分たききりうり。高家の概もこのからりなき。ついで遠くあや。いつきあも。評林の海大にたがして。龜角云みも及ら。劉向別録の語相違り。然れ共世書ハ。今ハ亡。綱たわい。今全書入る人か。只りよ引たる也。是るのさきわが。少異ありぬ。然れども此虞公が古事ハ。今も考れ。死と云る也。今之世も。亦。波。津。り。に。か。り。人。と。云。わ。り。彈。人。と。云。向。る。が。こ。の。一。虞。公。の。風。ひ。人。之。樂。意。の。よ。め。は。わ。れ。は。句。よ。い。心。は。し。く。よ。り。ぬ。え。志。も。も。樂。屋。乃。漢。と。眼。の。つ。き。た。る。可。い。當。れ。り。去。か。ら。ず。世。樂。意。ハ。あ。ふ。あ。う。ら。ん。と。そ。名。

をらぬ。と。可。惜。う。か。○予。按。ど。う。に。此。句。は。樂。意。ハ。必。し。と。き。ら。ち。う。と。と。琴。の。古。事。み。う。ら。む。と。○列。子。曰。瓠。巴。鼓。琴。而。鳥。舞。魚。踊。○史。記。二十。卷。樂。書。第。二。曰。晋。平。公。曰。寡。人。所。好。者。音。也。願。聞。之。師。曠。不。得。已。援。琴。而。鼓。之。一。奏。有。玄。鶴。二。八。集。于。廊。門。再。奏。之。延。頸。而。鳴。舒。翼。而。舞。云。云。○此。句。意。ハ。琴。の。画。讚。み。し。世。琴。や。社。人。の。彈。々。む。さ。む。し。の。漢。声。よ。梁。上。の。葦。でも。う。ら。ひ。清。顔。よ。い。鳥。奥。の。色。感。と。い。ぬ。ま。む。し。と。琴。は。德。を。林。と。し。ぬ。ん。と。も。少。あ。ま。り。入。れ。か。ら。ず。琴。の。藝。と。入。て。む。も。ん。び。か。き。な。ら。さ。ば。も。と。も。ち。り。き。も。強。く。し。し。と。ぬ。の。句。に。い。ま。づ。ま。き。し。と。磨。汰。

後家形鳥よ。ふいせうとていふ。あや。準らへし事と
 は文の文語也。又是程のり。翁のふにきくしや
 千鍛みといふ。と琴をいふ。死も次居ては。此巻とも。又
 えんよの風情格ふ。画讚の句幹也。去那。う。画讚といふ
 儘なる證跡有り。何者の集り。えん。○ 然るに
 注し年。明和。秋二六菴竹阿坊。四國九州の行脚終りて
 帰心せ候。此説の檢校。とて。えん。に。一閱し。て。えん
 こみ。て。う。ら。て。曰。此琴。實。小。的。中。せ。り。我。四。國。の。漂。泊。乃。此
 伊豫の國松山。少く何某の家。に。傳。下。三。幅。對。乃。軸。物。を
 見。け。白。で。中。め。り。て。右。は。其。角。左。は。素。堂。也。予。左。右。の。句。を。問。ふ

是。後。と。云。う。に。お。り。て。明和。春。す。み。や。う。信。で。り。と。あ。う。の
 松山の何某。此。許。一。言。は。送。信。よ。伊。豫。の。末。や。う。や。く。と。鑑。定。す。る。

樂器三幅對 画 探筆

左 太鼓

青海やを鼓ゆるて事此巻 素堂

中 琴

ち家形やをよと琴くは乃巻 芭蕉

右 笙

迹鳳凰

う。う。う。の。相。乃。後。家。形。也。望。此。巻。 其角

あにおひそ 予始て飲表す。可持の人名いさう故漳河の
略しらくひすよふにすし出さず。も皆予の方にあり。故
人の身うてるばし。嗚呼幸哉

贈物 一 さんる 柳 一 志 ちい 哉

解 志をいせりよかへ下初の酒あけん
手兼合は志あけりよかへ上はさくれん
ちあてえしよ上はあ
あれも是非あてん
ともあはれいあ
て小もあはれい

袋 云此句ハ柳の嬌るある人向つてに懸へていそ贈物なり
にいとわく。みはつるつ指し是もれやさし此解を言ふる句
也 **解** 云許六の字多法師不腫物のみさる柳とよき翁の短冊也
取持とり諸集に出る下のさつと誤と記をり按みさる柳
も宮初の案ありて柳此さる例乃再案の指肯と云たり

け句法玉連環体 口受 ありて詩奇連俳ともにけいふ尔柴
るし事法 **林** け句で出さる

説 **袋** ぬしくれまは正直也 **解** 毒品の手。たよ。去来抄
を引てあます。又句法の事ハ。後世好事の媚あり。翁の此
句法をきくこと。あらど。支考。去来。許六。何ぞ。あまらん
や。是らも此證據也。詩法。あかづらに。用るふも。不及事也。
又云此ふ尔柴詩奇連俳云と。詩にふ尔柴と云事不同。
五老井和訓唐詩解也。倭人の詩よふ尔柴あり。唐人
の詩よふ尔柴あり。ゆゑ海に垂たり。後には倭人の
詩れりと云。又連歌少也。詩句の法を。句作り不用る事

何れやと。諸宗匠に聞かざるも。中一いさ。
 向來ごとくに。詩句の法を令せて。考つん。却て句縮つ法
 甲え。幽玄辨出。解り。○又あるいぬ。い。解り
 字陀法。師の法を奉ふ。ち。柳のさるるを。枯骨と稱
 て。五速環成。おと。句法を妙と。つねず。是許六の意。法
 編。ごら。による。各。許六の。云。む。授物よ。さるる。柳の。志。あ。い
 とい。河の。次。才。さ。り。よ。う。つ。ま。正統。ち。う。あ。り。と。つ。ま
 へ。是。即。玉。の。つ。つ。あ。り。あ。づ。あ。づ。ご。ご。と。く。の。河。濱。さ。え。腫。物。よ
 柳。と。い。つ。ま。さ。り。ご。ご。と。く。の。さ。り。ゆ。詩。句。は。倒。粧。法。和。果。あ。り
 隔。句。法。あ。り。ご。ご。と。く。の。あ。り。ご。ご。と。く。の。や。う。さ。ら。ぬ。ご。ご。と。く

用いぬ事也。まを却て。再案の。粉骨。あ。づ。推量の解
 せつ。け。何。れ。ご。ご。と。く。の。や。う。さ。ら。ぬ。方。と。よ。う。と。せ。ん。い。正風
 賦。は。云。録。し。推。為。に。柳。さ。る。る。と。い。ふ。亦。に。隔。句。の。法。と
 也。聯。句。上。隔。意。の。法。と。も。詩。に。關。鎖。の。法。と。も。ソ。も。さ。ら
 ち。う。ち。さ。ら。ぬ。と。許。六。と。連。字。の。流。句。を。奉。て。衣。う。り。淺。身
 とい。つ。ま。さ。ら。ぬ。衣。う。り。里。の。淺。身。に。と。つ。く。い。わ。す。の。法。と
 ち。う。俳。諧。亦。和。歌。の。變。師。の。一。名。あ。り。て。亦。に。あ。り。し。と
 何。よ。あ。り。し。や。初。案。の。口。文。口。訣。を。ご。ご。と。く。に。迷。り。む。を。致
 して。池。と。の。と。○。本。來。抄。曰。浪。化。集。よ。さ。り。る。柳。と。い。ふ。
 是。ハ。予。の。誤。傳。を。さ。ら。ぬ。史。邦。の。小。文。庫。の。柳。の。法。り。致。す。

改出支考曰さつ柳といふ改めゆるや 去来曰は
つさ柳といひぬ考曰柳の志多ハ膽地よさるる比喩也
去来曰御くも柳の志にさるるさるるさるる柳こつと
ぬ根よす(ゆ)るぬ重ん予々保を仇と考曰吾子の説
いり色さるる只さつ柳と考ゆへ夫草曰泪の續きさ
るる此趨向の考うつるさるるさるる去来曰流るの志士
爰に予流るる口惜し比喩ふさるる非なくさるる也
にさるるさるる及つむ格位も亦吾あへ許六曰先師
の短冊よさるる柳とゆへ上柳のさつさるる首切に去来
曰首切さるる事ハ予々す亦よ美之今論に不及先師の

文よ柳のさつらと慥也許六曰先師のゆよりさるる
さるる向多し去来澄しと強しと也三子皆さるる柳
の況に落賢於判し給へ以上 ○去来の云々さるる。胆地ハ
也木柳のさるるさるるさるる一層向上の排骨あり
さるるて落材舎主の風雅なりと也。高き識有て世人
知事稀也。支考許六夫草之凡に。去来の云々識もさる
ら。今日れさるるや。身に落て。世俗小近さるる思ふし
亦也。予按さるるに。支考許六の。敏智に。去来の
意を知る事ハ。何さるる。さるる。一句の寛厚平和也
りさるる。さるる柳と云々さるる。去来の。向と乃識也

○卷第一

ころけい。後世の多し。乃弟を媚ふ。好事の人。連玉環
 轉ふ。句法をまはば。乃の横合と成りて。害のし
 ころけい。亦か思ふ。原をむむ。越はむ。道は早くすの
 心術。又及ふ。あまのし。又翁のちに大切の柳一本を去。身小
 巧つけ。意をらと。中さぬ。然れど。来々。す。あ。ま。せ。張の
 胸か徹し。多し。も。亦か。へ。す。此句詩六（前）と見えら
 まりや。年月もかけ。も。な。ご。ら。ら。や。茶。好。も。実。女。孫。し
 ころけい。夢をが。宮神の吟。再。榮。此。吟。と。わ。り。て。多。く。り。こ。し。
 推量の。沙。法。あ。一。一。已。り。ん。矩。と。や。難。し。い。づ。れ。を
 い。せ。せ。う。ら。か。し。不。冷。竹。小。色。せ。よ。さ。ろ。う。柳。柳。の

さつ。ころけい。色。句。意。い。回。り。も。也。後。物。が。柳。へ。こ。も。う。た
 らし。い。意。で。書。き。難。し。ま。ら。す。む。む。む。む。句。意。い。か。し。を
 さつ。ころけい。面。々の。好。む。も。あ。り。解。し。を。い。害。の。う。後
 ころけい。を。さ。い。ゆ。め。句。法。の。こ。い。ら。れ。く。を。去。未。抄。せ
 外。古。傳。か。し。係。の。潤。色。と。知。る。べ。し。

○法。く。此。柳。の。支。那。を。思。ふ。と。今。年。二十。餘。年。経
 一。寶。曆。の。は。し。夏。の。晴。の。夢。に。光。僧。平。然。と。あり
 て。曰。と。こ。は。年。月。は。柳。を。う。り。と。感。あり。す。く。知。む。と
 ころけい。右。よ。拂。子。を。持。左。の。掃。地。向。く。く。り。て。拂。し
 ころけい。か。り。け。り。し。し。の。い。は。是。を。ほ。め。や。く。に。傳。説。

女也楊柳也此... 常... 柳乃泥也... 此句也

林解 此句を出し候

説袋 もろろ邪妄之。異人のこと... 断... 柳... 泥... 邪智を弘め... 魔道と... 可恐々々

來曾のち... 雪也... 春草

袋 云題... 見... 冪... 陰... 時... 雪也... 春草

林解 此句を出し候

説 け注... 邪推妄説不可用也... 情... 素姓氣性... 陽氣發生

の氣をいへるも。句意ハ本曾山家の雪園とくも。春陽は
 氣乃ちまけり。有やけのよも。雪の中より。あつく色
 ありて。中いぬりや。よも。そも。春情と詩の色
 つまは。春陽の氣を来し。つと。詞。間。閑。早。得。春
 風情。と。此。ま。る。か。め。可。知。義。仲。の。墓。に。画。漢。し。不。決。然
 あり。む。何。れ。と。冊。句。の。注。を。か。し。け。る。也。義。仲。の。墳。ハ。江
 州。栗。津。の。義。仲。寺。所。知。し。信。州。め。し。栗。津。の。句。を。ま。

題を何れと。題を何れと。説叢大全卷第一終

